



自然科学書協会に期待すること  
やっぱり紙を、もっと電子を  
—二つの媒体の望ましい関係を探してほしい—

東京大学大学院情報学環 佐倉 統

第65期第2 回定時総会の報告

自然科学書フェア2016 / サイエンスカフェの報告

東京国際ブックフェア2016のご案内<sup>※</sup>

2016.7.19 NO.3 (通算 81号)

一般社団法人 自然科学書協会 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 | 神保町 101 ビル 1階 | TEL 03-5577-6301 | http://www.nspa.or.jp/



○著者略歴  
1960年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。理学博士。三菱化成生命科学研究所、横浜国立大学等を経て現在 東京大学大学院情報学環学環長。

東京大学大学院情報学環 佐倉 統

●自然科学書協会に期待すること●  
やっぱり紙を、もっと電子を  
二つの媒体の望ましい関係を探してほしい

「理工系専門書の出版社や自然科学書協会に望むこと」というのがいただいたテーマである。理工系であろうとなんであろうと、専門書であろうとなんであろうと、出版社や広く出版関係の組織に期待することは、ただひとつ、電子書籍と紙媒体書籍の「適切な」関係を築くことである。

紙媒体の本は、もうそんなには売れない。日本での紙の出版物の販売金額の推移を見ると、書籍も雑誌も一九九〇年代後半から減少の一途をたどっている。この先、これが挽回することがないのは明らかだ。

一方で、電子書籍は伸びている\*1。二〇一四年度の日本での市場規模は一六二六億円。前年比三五%増である。紙媒体の市場規模は一兆六八三億円（二〇一三年度）だから、電子書籍は七・五%程

度となる。まだそんなものかとも思うが、この勢いで伸びていけば、いずれ紙の書籍より多くなるのは間違いない。だが、紙の本がなくなることはないと思う。  
いや、絶対ない。

電子書籍はひとつのデバイスでたくさんの本を持ち運びできるし、キーワードをいっぺんに検索することも、意味のわからない英単語を辞書で調べるのもとても簡単だ。ぼくも愛用している。出張には手放せない。それでも、紙の本には、電子書籍にはない良さがたくさんある。

たとえば閲覧性。あっちへ行ったりこっちを見たり、全体をざっくり見るのには、やはり紙の本の方が便利だ。大学院のぼくのゼミでは、発表担当者は前日までに資料のPDFファイルをメンバー共有のドロップボックスに入れておくことになっている。誰でもそのファイルをダウンロードできるのだが、ほとんどの学生は紙のレジュームも欲しがらる。パラパラめくってあっちこっちを見るのが楽だからだ。これは、書き込みのしやすさも関係している。電子媒体だって書き込みはできるが、手書きで紙にガシガシと書き込むのとは、身体への刻まれ方が全然違う。

そしてなんとと言っても、実際の「物」であること。情報がパッケージになっていて「現物」として存在することの意味は大きい。たとえば、人にプレゼントするとき、電子書籍で上げるのは気がひ

ける。少なくともぼくは、贈りものならやはり紙の本だ。そのうち、3Dプリンターで打ち出すと紙の本と同じものが出てくるような情報のやりとりが可能になるのかもしれないが、これもだいたい先の話だろう。紙の手触りや手に持ったときの感触が大事な領域というのは、当分はなくならない。

翻って考えると、紙の書籍の大事なところは、「物としての出来映え」ということになる。文章が読みやすく印刷されていて、ページがめくりやすく、筆記具にもなじんで、さらには保存しておくアイテムとしての存在感。こういった要素を、しっかりと備えている本が、これからはますます必要になるのだと思う。

しかし、このところ気になるのは、本の作りがいささか雑になっているのではないかということだ。中身のことでない。装丁や造本だ。ぼくは、新しい本を読み始めるときは、まず真ん中へんから開いて、本の頭と尻尾に向かって少しずつ開き癖をつけていく。ある程度馴染んだところで、お気に入りの布製カバーをかけて読み始める。



佐倉統先生等の編集による『5』（詳細は次頁）

だが本によっては、開き癖をつけるのがうまくいかないことが時々ある。妙に固くゴワツとした感じですねなり開けなかったり、ちよつと力を入れて開くとどのところがパキツと折れてしまったりこれは、とつても悲しい。本は、開いたまま放置しても閉じてしまうことなく天や地の方から見たときに両側のページがきれいな曲線を描いたまま鎮座してほしい。そういう、なじむ感じをもっている本が、とんと少なくなつたような気がする。

製本だけではない。本文レイアウトが何とも情けない本も、ときどき見かける。ページの余白がやけに寸詰まりだったり行間が狭くて字間が広くとつてあつたりどちらも非常に読みにくい。さらにひどいになると、翻訳物で日本語がまるでチンパンカンパンで、どう考えても自動翻訳にやらせたと思えないものもあつた。さすがにこんなにひどいのは今までに一回しか出会つたことはないが、訳者がそんな訳文を出してきているのに編集者は何も言わなかつたというのが信じがたい。

繰り返すが、本の生命線は「物」としての存在感である。存在感を醸し出すためには完成度が高くなければだめだ。書き手だけでなく、企画、編集、装丁、製本、販売、すべて含めて、本の作り手の思いが込められていなければ、存在感は希薄になる。読手としては、そんなのだったら紙の本はいらない、ネットで良いじゃないか、ということになる。

さて一方で、電子書籍の環境も、もつと格段に良くしていつてほしいというのが切なる願いだ。多くの出版社は、いまだに電子書籍を紙の本の敵対者と思つていのではないのか？ これも繰り返すが、そうではないのだ。「本」は紙媒体と電子媒体と、両方あわせて「本」なのだ。どちらかだけが繁栄するということは、ありえない。

だから、もつとグーグル（じゃなくてもいいけど）と協力して、既出版の書籍の電子化を積極的に進めてほしいし、アマゾン等の電子書籍販売サイトでも新刊本の「立ち読み」をもつとたくさんできるようなしてほしい。電子化に抵抗したところで、紙の本の売り上げは増えない。そこにこだわるよりは、一刻も早く電子化を推進し、紙媒体との役割分担を明確にして、「紙十電子」で全体の市場を拡大していくべきなのだ。いや、べきというか、誰がどう考えたつて、それ以外に選択肢がないのは明らかだと思ふのだが。

インターネットで検索できない情報は、すなわち「存在しない」ことと同義になりつつある。このような認識にはぼくは断固反対なのだが、世の趨勢として、もはやいかんともしがたい。

ならば、覚悟を決めて、電子化を強力かつ迅速に進めていくしか選択肢はないだろう。

誤解されないように付け加えておくが、ぼくは図書館の閉架書庫の中を回遊するときに何より幸せを感じる、「紙派」で

ある。しかし、だからこそ、この紙の本の魅力を残すためにも、積極的に電子書籍化を進めるべきだと思つている。

専門書は、紙媒体の書籍としてもつとも残りやすい領域だろう。じつくり、ゆつくり、深く読まれる本だからだ。図版や写真が重要なものなら、紙質も内容を左右する要素になつてくる。コンピュータの画面と紙に印刷されたのでは、色調も線のタツチもかなり異なる。丁寧に鑑賞したり細かく分析するためには、紙媒体に印刷された図版は、やはり不可欠だろう。

そうやって本を作つていけば、当然高価なものになる。だが価格が多少高くても、もともと専門書を買つて読むような人たち（専門家予備軍）は、あまり買ひ控えないのではないのか。あくまでたとえばの話だが、価格が二万円でも重要な内容であれば、三〇〇部ぐらいは売れるのではないのか。それでビジネスが成り立つためには、どこをどう変えていけば良いか、考えていくことも必要なのではないか。特定のファン層がいる本であれば、クラウドファンディングなどを導入してもいいかもしれない。

ちなみに、今、東京大学情報学環の同僚の水越伸さんや東京藝術大学の毛利嘉孝さんたちと、『5（ファイブ）』という同人誌を続けている（前頁の写真）<sup>\*2</sup>。どこからも資金援助なしの完全に手弁当で、年二回発行。価格は一二〇〇円だが、各号四五〇部刷つて、どれも好調に売れて

いる。

紙には紙でなければできないことがある。本作りのプロのみなさんには、そこをとことん突き詰めてほしい。

\*1 以下、「データはいつでも」電子書籍情報まとめノート」による。

(<http://www.tb.biglobe.ne.jp/~yamass/in dex.html> 二〇一六年六月二二日確認)  
\*2 『5: Designing Media Ecology』 (<http://www.fivedne.org/>) 二〇一六年六月二二日確認

## 東京国際ブックフェア二〇一六

「第三回東京国際ブックフェア」(TIBF)が、九月二三日(金)から九月二五日(日)までの三日間、東京ビッグサイト西ホールにて開催されます。本年は会期が二ヶ月半後ろ倒しになり、金曜日から日曜日までの週末開催となります。

当協会は、例年と同じく三・五小間のスペースで、自然科学系書籍・雑誌の展示と販売を行います。販売・出展委員会では、読書推進を意識した特別展示のテーマ、ノベルティプレゼントの検討、多くの来場者に対応できる人員体制等の準備を四月より始めました。会員社の皆様には、より多くの出品をいただくとともに、当協会のプースへ足をお運びくださいますよう、ご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

(販売・出展委員会 二村忠彰)

## 第六五期第二回 定時総会が開かれる

去る五月一九日(木)一六時から日本出版クラブ会館において開催した、自然科学書協会第六五期第二回定時総会についてご報告いたします。

第二回定時総会は予算総会であり、その目的とするところは新年度(第六六期)事業計画書案並びに収支予算書案をご審議・ご承認いただくことですが、現在、当協会は一般社団法人への移行途上のため、公益目的支出計画(≡実施事業)の実施状況との兼ね合いが重要になります。

当協会の一一般社団法人への移行は、当協会が申請し内閣府によって承認された四年間の赤字公益事業(≡実施事業)によって、公益目的財産額を使い切ることが条件です。したがって、過去三ヶ年、決算時には公益目的支出計画実施報告書を提出し、その進捗状況を報告してまいりました。しかし、当初予定通りであれば移行を完了する第六五期の決算見込みにおいて、公益目的財産額がわずかに赤字になる可能性が出てきました。このため、理事会では内閣府に対し一ヶ年の実施期間延長を申請することを決め、この件を第3号議案「公益目的支出計画実施期間延長の件」としました。これにより、議案は、

第1号議案 第六六期事業計画書案承認の件

第2号議案 第六六期収支予算書案承認の件



金原理事長の挨拶



第二回定時総会の模様

### 認の件

第3号議案 公益目的支出計画実施期間延長の件

当日は皆様のご協力によりすべての議案が原案通り可決され、滞りなく定時総会を終えることができました。これも会員各位のご理解・ご協力の賜物と感謝申し上げます。以上、簡単ではございますが、定時総会のご報告とさせていただきます。

(総務委員長 飯塚尚彦)

■第六五・六六期理事会・委員会開催一覧  
(二〇一六年三月下旬～六月)

#### ●理事会

- ・四月二一日(木) / 一五時～一六時四〇分 日本出版クラブ会館
- ・五月一九日(木) / 一四時～一五時一〇分 日本出版クラブ会館
- ・六月一六日(木) / 一五時～一六時二〇分 日本出版クラブ会館

#### ●監事会

- ・六月三〇日(火) / 一二時～一四時 文化産業信用組合

#### ●専門委員会

- ・三月三一日(木) 販売・出展委員会自然科学書フェア幹事会 / 一六時～一七時三〇分 文化産業信用組合
- ・四月四日(月) 七〇周年記念事業特別委員会 / 一六時～一七時 文化産業信用組合
- ・四月一四日(木) 販売・出展委員東京国際ブックフェア幹事会 / 一五時～一六時三〇分 日本出版クラブ会館
- ・四月二五日(月) 著作・出版権委員会 / 一五時～一七時 日本出版クラブ会館

#### ●合

- ・五月九日(月) 販売・出展委員会 / 一六時～一七時二〇分 文化産業信用組合
- ・六月七日(火) 七〇周年記念事業特別委員会記念史小委員会 / 一四時～一六時三〇分 文化産業信用組合

・六月一四日(火) 七〇周年記念事業特別委員会祝賀会小委員会 / 一五時三〇分～一七時 日本出版クラブ会館

#### ●その他

◆五月一八日(水) 全出版人大会がホテルニューオータニで開催されました。

#### ■事務局だより

##### 〈住所変更〉

●株式会社北隆館  
旧住所…東京都港区高輪三―八―一四  
新住所…東京都目黒区上目黒

電話 〇三―五七二〇―一六六一  
FAX 〇三―五七二〇―一六六六

##### 〈退会のお知らせ〉

株式会社シーエムシー出版様は、同社からの申し出により平成二八年五月末日付で退会いたしました。株式会社シーエムシー出版様の退会により、現在の会員数は66社となっております。



## 自然科学書フェア二〇一六

当協会主催の「自然科学書フェア二〇一六」を六月一日(水)〜六月三日(木)まで、豊島区南池袋にある三省堂書店池袋本店書籍館四階特設会場にて開催しました。

今回のフェアは、当協会創立七〇周年を記念し、三省堂書店様の全面的なご支援をいただき、会員社からは一三〇六点半三八〇冊と、フェアとして過去最大の出品点数・出品冊数をもって催されました。当初予定していた特設会場のみならず、上りエレベーター前の陳列台や、レジ横にある面陳什器を使った展示も行い、お客様と自然科学書との出会いを演出することができました。



フェア会場風景



また、メインテーマを『知識がひろがる 未来がひらける 自然科学書フェア』と昨年のテーマから刷新し、理学・工学・農学・医学・家政と分野別に陳列し、また、「食事から始まる健康生活」「スポーツ医学・栄養学」「人工知能やロボットの」「基礎からわかる農業」「独学・再入門のすすめ」「ノーベル賞関連書」などのコーナーも設置しました。

(販売・出展委員会 御園英伸)

### サイエンスカフェ開催される

研修委員会では、三省堂書店池袋本店にて六月一日から六月三〇日まで開催された「自然科学書協会創立七〇周年記念自然科学書フェア」とのジョイント事業として、サイエンスカフェを二回開催いたしました。

六月一日(土) 一四時〜一五時一〇分  
講師：江守正多先生(国立環境研究所)  
演題：「気候変動リスクと人類の選択  
—地球温暖化で世界はどう変わるか—」

六月二五日(土) 一四時〜一五時一〇分  
講師：今村隆正先生(株)防災地理調査  
演題：「土砂災害と防災教育—「生きる力」を身につける—」

いずれも一般に関心の高いテーマ、そして講演上手で知られる両講師による見事なプレゼンテーションがあいまって、楽しくも熱気の高まったサイエンスカフェとなりました。講師講演の後には聴衆の皆様も参加した質問・交流タイムが設けられ、予定時間をこえて活発な意見交換が行われました。

(研修委員会 石黒太郎)



江守正多先生による講演「気候変動リスクと人類の選択」の様子(6月11日開催)



今村隆正先生による講演「土砂災害と防災教育」の様子(6月25日開催)

### 編集後記

最近、ミステリーやライトノベル系で、書店や古本屋、出版社・編集者、また書物をテーマにした作品が増えてきているように感じる。今年に入って私が購入した文庫本や電子書籍の新作だけでも十数点はあるので(シリーズものの続刊を含む)、それなりの市場が形成されているのだろう。そんな中、個人的にお薦めなのは山本弘氏による「BISビブリアトル部」シリーズだ(東京創元社、既刊3巻)。SF好きの女子高生をはじめ個性豊かな面々が「面白い本を紹介する戦い」を描いた日本初(たぶん)のビブリアトル部小説と青春小説で、SFからノンフィクション、科学本、ボーイズラブ、コミックやイラスト集まで、様々なジャンルの作品があふれるように紹介される。主人公たちが体験したことのない「戦争」と向き合う2巻目「幽霊なんて怖くない」の後半はとくに印象的だ。(T・K)